# フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００６
# 対談：鈴木慎之介　×　鳥原学

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT

この対談は、出品者と選考員が、展覧会を目前にして作品の理解を深めようという主旨で行うものです。
４週目は、福島に住む祖母が亡くなり、翌年迎えた新盆の様子を撮影した鈴木慎之介さんと写真研究者の鳥原学さんです。

---

## ●距離感のある写真

鳥原：この写真を撮ったのは学生時代ですか？

鈴木：そうです。撮ったのは２年の夏だったかな。祖母が亡くなったのが２００１年で、その翌年の新盆に撮りました。福島県の二本松市ってところなんです。

鳥原：おじいさんはまだ生きていらっしゃるんですか？

鈴木：僕が小さい時に亡くなりました。祖父母の子供が８人か９人。僕の父はその中の５番目かな……。

鳥原：昔は兄弟って多かったですよね。この時は何日間ここに滞在したんですか？

鈴木：福島には１週間弱くらいいたんですが、ここは１泊２日だったかな？

鳥原：それで何本くらい撮ったんですか？

鈴木：そんなに撮っていないんです。３６枚撮りを３本くらいですね。

鳥原：それでこれだけのものができちゃったんだ。タイトルは「新盆（あらぼん）」ですよね。

鈴木：この辺りでは最初のお盆のことを、「あらぼん」と言いますね。

鳥原：地域によって違うんだよね。新盆と書いて「にいぼん」と言ったり、初盆「はつぼん」と言ったり。何でこの新盆の時にこれを撮ろうと思ったんですか？

鈴木：カメラはいつも持ち歩いてたので、福島にカメラを持っていくというのも自然なことだったんです。最初はこの新盆を撮ろうというつもりも特になかったし、撮ってる最中もこういう風にまとめようという気はまったく頭になくて。でもこんなに親戚が集まることもいままでなかったので。

鳥原：何人くらい集まったんですか？　写真の中に集合写真があるけど、すごい人数ですよね。

鈴木：全員で４０名弱ですかね。お盆に集まったりはちょくちょくするんですけど、こんなに集まることはないですね。

鳥原：家が写っているけど、大きいですね。みんなこの家で寝泊りしたんですか？　布団とかどうしたんだろうな。人数分あったのかな。

鈴木：たくさんあったとは思うんですが、中には車の中で寝泊りした人もいたりして。僕も車でしたね。

鳥原：撮ってから４年くらい経ってますよね。フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」は去年も一昨年も募集しているんですけど、なんで今回応募したんですか？　前は知らなかったとか？

鈴木：フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」は知ってはいたんですけど、応募すること自体あんまり考えてなかった。でも大学も卒業して、どうしようかな、写真を誰かに見てもらいたいなと考えていた時に、前から気になっていたここに出してみようと思ったんです。

鳥原：撮影してから４年後にまとめて、今回出してみようと思った。４年経って改めて見直して、こうしておけばよかったということはなかったんですか？

鈴木：特にはないんですが、この写真では比較的人を撮ったつもりでいたんです。でも改めて見てみたら人を撮ってる感じがしなかったんです。風景として人がそこにいるという感じでした。今まで撮っていたのは、人が写っていないような写真が多いんです。自分の中で人の写真って苦手だって思う気持ちがありますね。

鳥原：もともと人に対しての興味はあるんですか？

鈴木：興味はあるんですけど、今一歩踏み込んでいけない自分がいます。

鳥原：それって、今の若い人たちに共通する他人との距離感なのかもしれませんね。でも親戚だからスーッと撮れたというのもあるんじゃないですか。力を入れずに。

鈴木：確かに力を入れずにっていうのはあるんですけど、だからって「やあ」っていってパチって撮れるわけでもなくて。撮ってる間はほとんど会話していないんです。これを見せた友達も言ってたんですけど「よそ者の目を感じる」と。そう言われるとそうだったのかなって。

鳥原：その微妙なところが面白いんですけどね。

鈴木：その距離感というか。そういうのは露骨に出てる気がしますね。小さい頃は、こんなに人数は集まらないにしても、集まる時は恐縮して、おとなしくしてる子だったんですよ。多分それがそのままでてるのかな。

鳥原：仲のいい親戚の人とかいるんですか？　子供のころから一緒に遊んでいた従兄弟とか。

鈴木：実はあんまりいないんです。歳が近い人は何人かいるんですけど、その人たちが毎年この田舎に来るかっていうとそうでもなくて。小さい時は遊んだりしたけど、この集まりではすごく久しぶりに会ったという感じでしたね。

鳥原：会ったら昔のような、子供の頃のような口調になったりしましたか？

鈴木：微妙なところですね。僕よりひとつ下とかふたつ下の子とかいるんですけど、タメ口で話そうかどうしようか、みたいな本当に微妙な感じだったんです。「おう、久しぶり！」という感じの人はあんまりいないかな……。

鳥原：鈴木さん以外に東京に住んでる人っているんですか？

鈴木：結構多いですよ。でも、ほとんど会わないです。

鳥原：大人になると兄弟の関係でさえ、誰かが死んだ時くらいしか会わなくなりますよね。親戚付き合いってそんな感じかなって。この１泊２日の中で親戚とのある種一体感みたいなものを感じたことはありました？　お墓参りの時とか、自分もこのグループの一人なんだなとか。

鈴木：食事してる時と、お墓に行くまでの道のりを一緒に並んで歩いたりする時にはちょっと感じるものはありましたね。

鳥原：面白いなと思うのは、親戚の一体感があるような、ないような……。親戚の人特有の安心感みたいなものは、撮られる向こう側にもあったんじゃないですかね。

鈴木：それはあるかもしれません。だから多分これも撮れたのかなと。

鳥原：故郷があるようでないような感じというのが出ている。僕も父と母が田舎から出てきて、大阪市内に住んでいました。半年に１回くらい田舎に行ってたので、こういう感じ方はよくわかる。親戚の人が集まったときの居心地の悪さみたいなもの。居心地が悪いんだけど、収まりがいいところもある。そういう家族関係。この写真の魅力はやっぱりそこですよね。

## ●一人遊びの記憶

鳥原：花火をしている写真があったけど、昼間から花火しているんですか？

鈴木：うちの親戚はみんな花火が好きで、昼間から爆竹とかバンバン鳴らすんですよ。隣の家とはちょっと離れているから、あまり迷惑にもならないんです。

鳥原：……ここに写っているのは井戸ですか？

鈴木：そうです。昔はここからちゃんと汲んで水を使っていたんです。今はスイカを冷やしたりとか……ですね。

鳥原：懐かしいって感じがするのかなぁ？　でも本人が懐かしがってる感じはしないよね。

鈴木：小さい時から福島に行って、一人で遊ぶ時間が多かったんですけど、みんなと一緒にいてもそういう時間を思い出したりしますね。お盆は暑いんですけど、東京の暑さとは違って、アスファルトの照り返しって感じではないんです。土から蒸気が出てくるような、もわっとしてる感じ。そういう匂いをすごく感じながら撮っていたりしました。たとえば、新聞を燃やして線香をつけてる写真がありますが、懐かしいという感じはしますね。そういう記憶が確実に体に残っていてこういう写真は撮っていると思います。

鳥原：それはなかなか面白いですね。だから不思議な感じが出ているんですね。人に対してはよそよそしいけど、風景に対しては馴染んでるような感じがするんですよね。特に一人遊びしてて、強烈に印象に残ってることってありますか？

鈴木：ウスバカゲロウの幼虫のアリ地獄とか、ひたすら掘ったりしました（笑）。雨の日とか、雨どいから水が流れて、土の上に水が落ちる音とかは強烈に覚えてる。夕立とか。日が暮れていく感じ。そういう時は一人でいたような気がするんです。

鳥原：記憶が映像的なんですね。僕も子供のころの景色とかよく覚えてる。田舎の暗さとか。かまどがあったんですけど、そこの杉を焚き付けた匂いとか。そういうのって、次に行ったら新築されてなくなってたりして消えていく。ここには消えていく何かが写ってるような気がする。自分の記憶とかぶるものがあって、懐かしさを感じるんですよ。子供の頃に田舎に行って親戚の子と遊んだけど、どうしてるかなとか。かまどがあったけど、いつなくなったんだろうとか。そういうことをふと思う。その見方は、親の世代が地方出身で都会に出てきて、祖父母が地方にいてという人の典型なのかなと思いますね。

鈴木：従兄弟たちを撮っている時は、自分が幼い頃に一人で過ごしたこういう時間を、この子たちもこの場所で感じているのかなって。無意識のうちに自分の幼い頃と重ねていたのかもしれない。そうだったのかなって、後から思ったんですけどね。

鳥原：それは写真の面白いところでもありますよね。自分が撮ったものなのに、出来上がったものを改めて見てみるとそこから新しく読みとれるものがある。不思議ですよね。

## ●家族という共同体の解体

鳥原：それでこの公募展に出されて、出品が決まったと言われた時はどうでしたか？

鈴木：人に見てもらいたいっていうのがあったから、いろんな人に見てもらえるいい機会だと思いました。でもこういう家族のお葬式というような写真は他にもあったんじゃないですか？

鳥原：家族の写真は何点かありましたけど。あと、祭りの写真を撮ってるのもいくつかありましたね。青森だったかな？　しっかり伝承されてる儀式を撮ったものとか。鈴木さんの写真には、日本の慣習とか家族の問題なんかがたくさん入ってると感じたんですよね。僕はなんとなく家族が解体していく時の記録のような気がした。血縁による大きな共同体があって、要になっていたおばあさんが亡くなった。それで家族の絆がバラっと解けていく、そんな写真にも見えたりするんですよ。家族のつながりが、少しずつ少しずつ薄くなっていく。鈴木さんの近しいけど、ちょっと疎遠な態度とかにそういうのが出ているのかなって。

鈴木：実際にその場に自分がいると、客観的に考えようと思っても、なかなか完璧には考えられないんです。人に見てもらってそういうことを言ってもらわない限り、自分の中では自分の考えでしかなくて。

鳥原：けっしてこの写真は深いところに入っているわけじゃないんですよね。親戚の関係をずっと追って撮っているわけじゃないですから。でも１泊２日の一瞬の感じはよく出てると思うんです。２００２年のある大学生にしか撮れない記録ではある。勝手にこんなこと言ってますけど、大切なのは鈴木さんがこうした体験をちゃんと自分のものにして、次の写真行為に結びつけることですよね。この写真を展示することはこの人たちの了解をとってるんですか？

鈴木：はい。最初はこの親戚の人たち全員に「やります」って言って、すぐ「いいよ」って言ってくれて終わると思ってたんです。でも実際は違って、簡単に展示できるわけではないんだと思いました。

鳥原：どういう反応だったんですか？

鈴木：「どうぞやってください」という人もいれば、やっぱり今の社会情勢があんまりよくない中で、子供もいっぱい写ってるし、名前も出てるしとかいうのがあって、なかなか返事をしてくれなかったり。

鳥原：いきなり電話がかかってきて、あの時撮った写真で写真展やるんだっていったらみんなびっくりするでしょ？

鈴木：そうですね。手紙出して、一軒一軒まわってきました。

鳥原：一人一人とちゃんとやり取りするのは初めてだったんじゃ……？

鈴木：そうかもしれません。ちょっと緊張しましたね。こういうふうに、自分から話しに行ったりとかなかったので。

鳥原：話しにいくことで、こういうことを写真に撮ったという自分の責任感みたいなものとか感じましたか？

鈴木：今まで写真に名前や住所が写り込んでいるのがどうかという話は周りで聞くことはあっても、実感はなかったんです。でも今回自分がそういうところに立たされて、身内という環境だったにも関わらず、こういうことだったのかってよく分かりました。

鳥原：親戚の人たちが見に来てくれるといいですね。展覧会を見に来る人に対して、鈴木さんご自身はここは見て欲しいみたいなものはありますか？

鈴木：この写真のここを見てというのはあんまりないです。この写真はこうでしょ、とか言葉であまり言いたくない。このままを見てくださいという感じです。

## ●自分が楽しむが原点

鳥原：ここに写っているのはお墓ですか？

鈴木：そうです。先祖のお墓なんです。祖母のお墓ではないんですよ。また別の場所に先祖の墓があって、そこにはこういう土をこんもりと盛り上げた土饅頭みたいなものがあって、そこにお花を供える。習慣なのかどうかわからないですけど。

鳥原：土葬みたいな風習があるの？

鈴木：そうかもしれないですね。墓石がない理由はあんまり聞かなかったですけど。これもお墓なんだなというのは幼い頃から思ってましたね。

鳥原：そういう話って聞かないと分からないですよね。死んだらどういう風に昔は葬ったのかとか。都会に出てきた親とかって、長男でなければ墓を継がないですから、墓の継ぎ方なんてわからないですよね。こういう儀式って地方によって変わるじゃないですか？　結婚も葬儀も。機会があれば知ってみたいと思いませんか？

鈴木：知りたいですね。ちゃんと聞いとけばよかったです。

鳥原：鈴木さんの中ではこのテーマは続いていくんですか？　福島とか血縁者、もっと大きな「鈴木一族」だったりを撮っていこうとか。

鈴木：今のところ予定はないです。でも撮らないという気はしていない。またみんなが集まって、自分もその場にいて、それで撮りたいと思ったら撮るという感じでしょうか。

鳥原：今はどんなものを撮ってるんですか？

鈴木：最近はカラーで撮ったりもしてます。これとは全然違ってデジタルではないけど、写真に手を加えて絵みたいに作り込んでいく写真です。もともとは絵が好きだったんです。

鳥原：鈴木さんはどうして写真を始めたんですか？

鈴木：一番最初は親がコンパクトカメラを買ってきて、めずらしくてよく撮ってた。それからしばらくして、確か梅の花か何かを撮った時の写真を見て、「何か違う」と思って、高校の時に中古の一眼レフを買ったんです。もともとは絵がすきだったんですが、大学は、絵の勉強をするよりも、写真を勉強する方がその当時は自分の中ではしっくりきたんです。どうしてか分かりませんが。

鳥原：実際大学入ってみてどうでしたか？

鈴木：面白かったですね。それまで黒白の写真って大学入るまであんまり撮ったことなくて、現像もしたことなかったんですけど、自分で現像してみて、自分で作るのが好きなんだなと感じた。今でもそうだけど大学４年間ずっと黒白でしたね。ずっと現像ばかりしてました。卒展は、絵を描いている感覚に近い感じの写真。今撮っている写真と同じように、作り込んでいくものでした。

鳥原：将来はどんなふうになりたいですか？

鈴木：これは自分のダメなところでもあるんですが、あんまり考えても先に進まないんですよね。写真を撮ってて、次にこういうの撮ろう、作ろうって思って、それに到達するまでにどうしようかと考えたりはするけど。到達点というのはあんまり考えてないですね。自分の作るものでどれだけ楽しめるかというところはある。原点は自分が楽しめるかどうか。今のところそれは間違いではないと信じているので、そこを目指したいです。

鳥原：写真やってる時はどのプロセスが楽しいですか。撮影？　現像？　プリント？

鈴木：それは写真によっても違う。現像している時が楽しい写真もあるし、撮影してる時が楽しい写真もあるし、両方の時もあるし。

鳥原：ちゃんとカメラマンやっても食べていけそうじゃないですか。今回この写真をこのようにまとめた意味というのは、今後鈴木さんにとって多分大きくなると思う。できたら沢山作って沢山発表してください。

鈴木：自分の作るもので何かできないかなと思って、それで就職はしなかった。先日バイトも辞めたけど、写真は撮っています。とにかく楽しみながら作って、日々頑張ってます。

２００６年６月１９日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）